

日本点字図書館における用具事業史の再考

Rethinking the History of useful items for visually impaired persons
in Japan Braille Library.

NISHIWAKI Tomoko

西 脇 智 子

日本語コミュニケーション学科准教授

抄録：

本稿は社会福祉法人日本点字図書館における用具事業史に焦点をあてている。昭和 39 年の世界盲人福祉会議出席のため渡米した本間一夫はその帰途ヨーロッパを回り欧米の盲人用具 150 点を収集し、帰国後に開催した展示会を機に昭和 41 年の盲人用具販売に至る史実が起点とされてきた。継続調査の結果、加藤善徳と花島弘から得られた新たな事実に照らして用具事業史を再考した。

Summary：

In 1964, HONMA attended the World Council of Welfare for the Blind in the United States and subsequently toured Europe, where he acquired approximately 150 items designed to assist visually impaired individuals. This initiative led to the launch of product sales for the visually impaired in 1966. This paper revisits the history of these useful products for persons at the Japan Braille Library, focusing on the contributions of KATO and HANASHIMA.

キーワード：日本点字図書館、用具事業、式場隆三郎、本間一夫、加藤善徳、花島弘

Keywords：Japan Braille Library, the useful for persons with visual impairment, Ryuzaburo SHIKIBA, Kazuo HONMA, Zentoku KATO, Hiroshi HANASHIMA

はじめに

社会福祉法人日本点字図書館（以下、日本点字図書館）の第3の事業となる用具部への道を拓いた欧米視察は、同館初代後援会長の式場隆三郎の英断によるものである。昭和39（1964）年の欧米視察の折に持ち帰った盲人用具150点は、翌年、同館ならびに「身体障害者福祉展」において展示された（西脇2023）。筆者は、この「身体障害者福祉展」に注目して調査を継続するため、同館の『感謝録』の「事業報告」に掲載された記事を①日本点字図書館初代後援会長が率いた「渡米支援後援会」が発足した昭和39（1964）年を中心に置いて、②昭和39年度以前、③その後10年度、すなわち昭和49年度までの概況把握を試みた結果、「身体障害者福祉展」における日本点字図書館の活動は、昭和31（1956）年から19回連続して出展していたことが判明した。また、昭和42（1967）年度から昭和44（1969）年度の「事業報告」には、「国産盲人用具展示」という新たな項目が明示されるようになり、「和製盲人用具」として出展していた史実が浮かび上がってきた（西脇2024）。

日本点字図書館では、同館の用具事業創設50周年を記念して特別企画「本間一夫と盲人用具の50年展」を開催している。同館内にて2014年11月に開催したこの企画展は、昭和39（1964）年の第3回世界盲人福祉会議出席のため渡米した本間一夫と加藤善徳がその帰途ヨーロッパを回り欧米の盲人用具約150点を収集し、帰国後に開催した展示会にて好評を得たことを機に昭和41（1966）年に盲人用具販売に至った史実を源泉としている。

筆者は、日本点字図書館における草創期における用具事業に焦点をあてた史的研究調査を同館の許可を得て継続してきた結果、今般、再考するための一助となり得る諸資料を発見するに至った。とくに史的研究を進展させるためには、当事者である加藤善徳と花島弘から得られる諸情報は不可欠である。そこで、この機にこれまで報告してきた史実の行間に埋もれている新事実の所在を明らかにし、同館における草創期の用具事業史の真実を探ることが本稿の研究目的である。

今般「日本点字図書館における用具事業史」を再考するにあたり、同館の許可を得て、館内に所蔵されている諸資料の閲覧ならびに情報収集作業を実施する手法で調査を実施した。なお、掲載許可を得て写真等のデータ提供がなされたことを付記する。

1. 日本点字図書館における用具事業創史の認識

平成26（2014）年、日本点字図書館は用具事業創設50周年を記念する特別展を開催している。「本間一夫と盲人用具の50年展」と題するこの企画の趣旨は、同館所蔵の「盲人用具」の展示会開催と「展示品リスト」を発行することにある。

いずれの資料も昭和39（1964）年、すなわち、同館創立者の本間一夫とともに加藤善徳が欧米視察の際に約150点の盲人用具を購入し持ち帰った年を用具事業の創始としている。

館長の天野繁隆（当時）は、用具事業創設50周年の記念特別展開催の予告として、＜ユニバーサルデザインは「にってん」から＞と題する文章を『にってんボイス』に寄せている（天野2014）。以下の枠内に引用する。

当館が視覚障害者用生活用具の開発と普及事業を開始したのは1966年のことです。したがって、あと2年で発足50年を迎えることになります。ですが、この視覚障害者の生活用具への取り組みの始まりには他にも考え方があります。1964年、創立者の本間一夫と本間の片腕であった常務理事の加藤善徳が、ニューヨークで開かれた第3回世界盲人福祉会議に参加しました。その帰路、アメリカ、ヨーロッパの計9か国、17都市、40数施設をまわり、約150点の盲人用具を購入し持ち帰りました。この年を始まりとする説です。私はこの説を採り、今年を当館用具事業50周年と位置づけ、この秋開催予定の「オープンオフィス」で、当館の用具事業を振り返るような企画を何か行いたいと思っています。

「創設50周年」の起点はいつになるのか。それは、同館が用具事業の創始を認識する上で極めて重要な視点である。最終的には「昭和39(1964)年」を起点と位置づけて「創設50周年」と決定し、「展示品リスト」を発行している(本間一夫と盲人用具の50年展企画委員会編2014)。そして、次の内容を網羅したプレスリリースを発表している。

①日本点字図書館では、用具事業創設50周年を記念して特別企画「本間一夫と盲人用具の50年展」を同館内で開催すること。②開催期間は、2014年11月11日～11月16日とすること。③開催概要としては、「盲人用具事業は、1964年に当時の館長である本間一夫が海外の盲人用具150点を収集したことに端を発しています。その後、これら盲人用具の工夫から始まったバリアフリー商品の考え方が他の障害分野にも広がり、より多くの人々に使いやすく配慮された共用品・ユニバーサルデザインへと発展しました。今年は海外盲人用具収集から50年の記念の年。本間が持ち帰った海外の盲人用具をはじめとした国内外の盲人用具の収集品から約150点を選び、あらためて紹介するとともに、その後の共用品・ユニバーサルデザインまでの歩みを説明し、その意義を伝えます。」と報じること。④企画展の展示内容は、「Ⅰ：昭和30年代の用具(主に、点字器、タイプライター)、Ⅱ：海外の盲人用具、Ⅲ：国内の盲人用具、Ⅳ：盲人用具から共用品・ユニバーサルデザインへ」に分類すること。

なお、このプレスリリースには、共用品推進機構の星川安之が「推薦文」を寄せている(星川2014)。以下の枠内に引用する。

「本間一夫と盲人用具の50年展によせて」

今、日本で販売されているシャンプー容器の側面にはギザギザが付き髪を洗う時、目をつぶる全ての人がリンス容器と識別できるようになっています。また、家電製品などの日用品においては、スイッチ部「オン」が分かるような小さな凸点や点字がつくようになりました。これらの工夫は1991年、日本点字図書館が行った「目の不自由な人々への調査」で、明らかにした不便さを解決するため、日本点字図書館が、多くの関係機関と協力し、一企業から業界

へ、そして日本工業規格（JIS）更には、国際標準化機構（ISO）へと発展させていった結果です。それら工夫の原点は、日本点字図書館が、50年も前から開発と販売を始めた「盲人用具」にあります。試行錯誤を繰り返し作られてきた多くの盲人用具の工夫点は、目の不自由な人だけでなく、世界中のより多くの人たちの便利さにつながっています。世界に広がった日本発のユニバーサルデザイン、その原点になった多くの「盲人用具」をご覧いただくと、歴史の重みと共に、更なるアイデアが浮かんでくることと思います。

公益財団法人 共用品推進機構 専務理事 星川安之

さらに企画展終了後には、同館はホームページに「日本点字図書館オープンオフィス」のご報告と題する記事を掲載している。現在はリンク切れのため、筆者の手元データより、関連する文章を抜粋するとともに写真（図1）を以下の枠内に再掲載する。

11月15日、16日と開催いたしました「日本点字図書館オープンオフィス」にご来場いただきありがとうございました。例年この時期には、「日点みんなのつどい」という名の式典で、勇退ボランティア表彰や本間一夫文化賞受賞式などを行なっていましたが、一般のかたへ日本点字図書館の仕事を広く知っていただくため、昨年度よりオープンオフィスとして施設公開イベントとして開催していました。当日は、仕事内容を基本にした体験型の業務紹介企画やパネル展示などを行ない、視覚障害者への理解と事業の役割をお伝えしました。2日間で約1,000人の方にご来場いただき、当館事業のご紹介を通し点字図書館への理解を深めていただきました。

企画展 用具事業創設50周年記念特別企画 「本間一夫と盲人用具の50年展」

先んじて11月11日より始まっていた企画展では、(1)昭和30年代の用具（主に点字器、タイプライター）、(2)海外の盲人用具、(3)国内の盲人用具、(4)盲人用具から共用品・ユニバーサルデザインへのコーナーに約150点の歴史的展示を行ないました。11月11日からの来場者合計は、700名となりました。



図1 日本点字図書館ホームページに掲載された「本間一夫と盲人用具の50年展」の記事

なお、この記事は、現在はリンク切れのため、本稿印刷にあたっては日本点字図書館より提供された写真データをもって掲載した。

なお、この「盲人用具事業創設 50 周年」を記念する行事は関係者によって準備され、翌年、平成 28 (2016) 年 11 月 24 日 (木) には、ホテルグランドヒル市ヶ谷に於いて、社会福祉法人日本盲入社会福祉施設協議会用具部会主催・日本点字図書館共催による「盲人用具誕生 50 周年記念」の講演会と祝賀会が開催された。講演会では、日本点字図書館用具部初代部長の花島弘が「盲人用具誕生を振り返って」、そして、同館用具部長経験者の杉山雅章が「近年の盲人用具について」と題して登壇している (杉山 2021 : 64)。

2. 「盲人用具」という所在

「盲人用具」のあゆみについては、日本点字図書館の関係者による対談等を介して、時系列に発展の経緯が報告されている。たとえば、昭和 51 (1976) 年発行の『点字毎日』には、「盲具を語る」と題して、当時、日本点字図書館館長の本間一夫・用具部の花島弘、国立特殊教育総合研究所の木塚泰弘の三者による座談会の様子が掲載された。日本点字図書館では、この間、昭和 39 年 (本間一夫と加藤善徳) と昭和 50 年 (花島弘) の二回にわたる欧米視察の折に盲人用具の購入を実施してきた。この対談の時点において、世界の盲人用具約 2000 点のうち 5 分の 1 は日本で見られるようになった状況が報じられている (本間・花島・木塚 1976)。また、平成 10 (1998) 年発行の雑誌『視覚障害』では、日本の盲人用具の開発と普及について振り返り、「盲人用具と歩んで 30 年：専用品から共用品までの道を振り返る」と題する花島弘 (1937-2023) と福井哲也の対談が掲載された (花島・福井 1998 : 28-39)。

筆者らは、日本点字図書館に於ける用具事業史に関する研究を進めるために、同館の濱田幸子と川島早苗とともに花島弘への聞き取り調査 (2021 年 3 月 5 日・16 日) を館内の本間記念室に於いて実施した。また筆者は、同年 3 月 18 日に花島弘より関連する諸資料を手渡しで受け取っている。しかし、それらの情報に照らしても補足しなければならない花島弘の「盲人用具」に関する先行研究の収集作業には難渋し投稿にいたる作業が停滞していた。今般、ようやく出典を明記するに至ったので調査結果を下記に報告する。

2-1. 花島弘による「盲人用具」の位置づけ

日本点字図書館では、同館の盲人用具の開発・普及が本格的にスタートしたのは、昭和 39 (1964) 年、東京オリンピックの年としている。今般、日本点字図書館における「盲人用具」への取り組みについて、日本経済新聞社が 1994 年に発行した E&C プロジェクト編『「バリアフリー」の商品開発』に、花島弘が「盲人用具」について詳細に述べていることが判明した。

花島弘は、「視覚障害者が日常、もっとも不便に感じていることは、読み・書き・移動といわれており、盲人用具の歴史もこれらの機器の開発から始まった」と指摘し、視覚障害者が必要としている機器 (用具) を次の 9 つに分類している。

すなわち、①日常生活を便利にするための機器、②コミュニケーションに必要な機器、③移動に必要な機器、④教育に必要な機器、⑤就労に必要な機器、⑥社会環境整備に必要な機器、⑦環

境の認知に必要な機器、⑧スポーツや遊びに必要な機器、⑨その他である。

そして、「しかしながら、こうした盲人用具の開発や製造・販売に取り組んでいるところは、まだまだ盲人福祉施設などに限られており、高度な技術や大きな資金を必要としない身近な生活用具を中心に扱っているところが大半なのが現状である。これは世界的に共通した傾向である。」と述べている（花島 1994：22-23）。

筆者は、盲人用具の変遷を探ることとともに、この欧米視察が実現するに至った「盲人福祉調査渡米後援会」を結成した同館後援会長の式場隆三郎の尽力に着目し再考を重ねてきた。周知のとおり、式場隆三郎は日本点字図書館後援の初代会長に就任し、同館の事業発展に尽力した。特筆すべきは「盲人福祉調査渡米後援会」を結成した後援会長として、率先垂範、渡米実現のための募金活動に熱心に取り組んだ成果である。筆者は『医家芸術クラブ』の機関誌を対象に、日本点字図書館に関連する記事調査を実施し、式場隆三郎の立場性からみた活動の史実を明らかにしたが、この時点では加藤善徳によって報告された下記の引用にとどまっていた（西脇 2023）。

加藤善徳は、「日本点字図書館三十五年小史」に、＜第3期の10年間は「基礎形成期とも称すべき時代であった。従来の点字に耳からの本テープが加わり隣接地の購入により将来の拡張に加え、欧米の現実把握によって、日点の行くべき方途が確立したのである。」＞とし、第4期は発展膨張の準備期と位置付け、「昭和40年2月に、欧米盲人用部展示会を開催、以後数回この回を催し、ついに購買部（のちの用具部）の発足を見た。」と述べた。昭和49（1974）年時点での用具部の取り扱い点数は「113,878点であった」と報告している（加藤 1975：2-5）。

日本点字図書館の第3の事業「用具部」が設置されたことによって、情報の拠点となり、輸入品に加えて国内でも製品化が進んだ。昭和43（1968）年には、当時の厚生省から「盲人用具販売斡旋事業」が委託され、昭和49（1974）年には「日常生活用具給付制度」が盲人用具にまで拡大された。式場隆三郎が熱心に取り組んだカナタイプライターや計測・計量器などは年を追って指定され、「盲人用具の流通」が急速に拡大していった経緯は周知のとおりである。

2-2. 人と人の出会い

「共用品」の原点が「盲人用具」であるゆえんには、人と人の出会いが及ぼした影響は少ない。花島弘と星川安之との出会いは特筆すべきことであろう。

日本点字図書館が「盲人用具」を「共用品の原点」と評するその源流は1980年代という時代の変遷に映し出されるものである。すなわち、象徴的な商品「メロディボール」の登場である。昭和59（1984）年に販売された初代の「メロディボール」は同館のふれる博物館に、現在も保管されている。

昭和55（1980）年、玩具メーカーの「トミー工業」（現在の「タカラトミー」）は、創業者の富山栄一郎の遺訓を受けて「ハンディキャップ・トイ（HT）研究室」を新設した（富山 1994：301）。入社半年後の9月1日、創業者の三回忌の日に、障害児のおもちゃを研究開発する部署が新設され配属になったのが星川安之である（星川 2020：190）。

星川安之は、配属1年目はさまざまな障害のある子どもたち約1,000人に会い、「どのような

玩具であれば遊べるか」を聞き取り調査し、2年目からは商品化をめざした。可能な事からと「目の不自由な子どもたち」を対象を絞り調査した。目の不自由な子供たちの家庭を東京都の施設から20軒紹介してもらい、繰り返し「ニーズ」を聞きに回った。その結果、20軒ともに共通して「あったら良い」と希望したのは、「音の鳴りつづけるボール」であった^{註1}。なぜならば、「鈴の入ったボールはそれまでもあったが、ボールの動きが止まると音も止み、遊びもそこで止まってしまう」からである（星川 2011：88）。障害のある子どもたちのための玩具の研究・開発が始まったHT室（ハンディキャップ・Toy研究室）の最初の商品が「メロディボール」^{註2}である（図2）。



図2 1984年に発売された盲人用具「メロディボール」

現在、日本点字図書館ふれる博物館に保管されている。「商品の入っていた箱」（左）と「ボール」（右）の写真は同館より提供されたものである。

3. 『医家芸術』に掲載された「ていだん：盲人福祉に生きる」の意義

日本点字図書館は、創立後から昭和39（1964）年まで、「指と耳で読む」盲人の読書活動を支え、「読みたい」という希望に応じて尽力してきた。第3の事業ともいえる、用具事業への参与は、まさに昭和39年の欧米視察を契機に躍進したといえよう。

筆者は、日本点字図書館の初代後援会長として尽力した式場隆三郎の史実を探るため、関連資料の収集ならびに整理を試みてきた。その時点で判り得た事実を列記して活動実態を報告した（西脇 2023）。本間一夫・加藤善徳・式場隆三郎による「ていだん」は、昭和40（1965）年10月6日に式場邸にて収録され、同年11月1日発行された『医家芸術』第9巻第11号に掲載された。

この「ていだん」は、「盲人福祉に生きる」と題して、『医家芸術』に掲載されたことは記録したものの、「ていだん」の内容についてはあえて言及しなかった。なぜならば、人と人とのつながりが浮かび上がり、それぞれの過去の出会いが交差し合っており、直接的に、あるいは間接的なできごとを時間軸に沿って書き写し解明するための作業は資料不足から停滞していたからである。本稿では掲載文の一部分に限定されるが以下に紹介する。

式場隆三郎は、「ていだん」の冒頭において「一般読者に本間先生をご紹介したいという趣旨ですから」と断り、本間一夫の生い立ちについての話題から始めている。

当時、盲学生を受け入れてくれるのは、唯一、関西学院大学であった。本間一夫は、その英文科で学んだ。「岩橋さんは私もよく知っています。あの方は妹さんがずっと手引きをして助けていられたようですが、先生の場合はどうなされたのですか。」というくだりがある。「岩橋さん」とは岩橋武夫を指している。

式場隆三郎は、この「ていだん」収録の翌月11月21日に逝去した。式場隆三郎の友人代表として弔辞を依頼されたのが壽岳文章である。岩橋武夫の学友であり義弟にあたる。すなわち岩橋武夫の妹である静子の夫であり、また、本間一夫が在学中に学んだ関西学院大学教授でもあったこと等を読み取ることでできる会話である。盲界では、岩橋武夫の妹の静子が、岩橋武夫の学友であった壽岳文章と結婚したことは周知の事実であり、改めて長々と説明することはなかったといえよう。したがって、この「ていだん」でも詳しい人間関係を映し出す会話は記録されていない。

「ていだん」の話題はさらに続く。式場隆三郎は「大阪のライトハウスはいつごろできたんですか。」と本間一夫に話を向けるくだりもある。本間一夫は「昭和10年ごろだと思います。関西学院へ行きましたときは、建物が建って間もないところでございました。」と答えている。やがて世界で13番目となる「ライトハウス」を創設した岩橋武夫を中心に、人と人のかかわりが浮かび上がってくる。その時代背景に共通する居場所のひとつは関西学院にあった。しかし、本間一夫は、関西学院における人と人のかかわりに照らして、壽岳文章と静子、そして壽岳家と式場家の家族ぐるみの長きにわたるやりとりを描くことはなかった。本稿では、この関係性についての言及は控え、別の機会に譲ることとした。

さて、この「ていだん」における肝心の「盲人用具」に関連する会話に着目し、以下の枠中に引用する。

式場 （前略）私は最近の日本の盲人福祉運動の中では、昨年あなた方が欧米を廻られて日本といろいろな点で比較研究され、そして特に盲人の生活用具がこれだけ発達しているのに、日本はこんなに貧弱な状態だと実物でもって示して下さいったことは、ほんとに大きな収穫だと思っておりますが、その話をもう少し伺いたいと思っております。

本間 先生を中心に、1415人もの方からご協力いただき、50日間欧米を廻ってこれ私どもはほんとうに感謝しております。図書館の勉強をするということ、それからニューヨークの盲人福祉会議に参加するというのが、直接の目的だったわけですが、初めは三番目の目的ぐらいに考えておりました、お話の盲人用具を集めることが、むしろ結果的には、大変大きな反響を呼び、喜んでいる次第でございます。

加藤 展示会を2月と5月と7月と、3回開きました。第1回目のときは、九州からも東北からも約500人がわざわざこれだけを見るために出て参りました。（後略）

加藤 （前略）さっそく式場先生が顧問をお引き受けくださった盲人用計量器普及協会が着々と今いろんな計量器を作っております。（機械を見せて）（後略）

本間 ごく短いあいだに、メジャー、はかり、温度計、もう一つ身長計も作りました。近く体重計も作るというてますけれど、大変早いテンポですね。

(中略)

式場 こんど持ってこられた中で、一番みんなの希望の多いのはなんでしたか。

加藤 時計、それから血圧計です。(後略)

上記のとおり、帰国後の活動は展示会開催だけにとどまらない。式場隆三郎の功績は、盲人用具の研究開発への道を拓いたことにおいても顕著である。

4. 加藤善徳からみた日本点字図書館の用具事業

今般の継続調査の結果、加藤善徳の自著『盲人福祉に生きる：生きがいを求めて 40 年』（昭和 46 年初版＝日点文庫 No.12、日本点字図書館発行）に、昭和 45 (1970) 年 7 月 29 日、韓国特殊教育研究会での講演「盲人用具の開発と現状」が掲載されていることが判明した（加藤 1971：84-89）。そもそも加藤善徳に依頼された講演の主題は「盲人用具開発が盲教育に及ぼす影響」であったが、「一図書館人として、盲人用具の開発と現状」というテーマにしばらく講演したものである。晴眼者の加藤善徳は、本間一夫とともに欧米視察し「盲人用具」と出会ったことから話し始めている。以下の枠内に引用する。

1964 年の夏、ニューヨークで開かれた第 3 回の世界盲人福祉会議に出席の途、欧米各地の盲人施設をたずね、その実際を見聞することができました。所要日数 50 日、行程約 5 万キロ、9 カ国、20 都市であり、盲人図書館 18、点字出版所 7、盲学校 4、盲人用具製作所 3、盲人授産所 7、その他 11 で、いずれも直接間接に盲人用具に触れる場合が多かったのであります。これらを通して、もっとも心を打たれ、また驚嘆したのは、盲人生活用具の発達でありました。

1964 年の時点において、わが国には、点字器、点字タイプライター、白杖、義眼、ソロバン程度しかなかったのに、彼地には盲人が晴眼者同様に生活し得るよう、各種の生活用具が何百種も開発されていました。しかもそれが比較的安価であり、同時にその用具が、盲人の買いやすいよう、盲人の多く出入りする施設には、必ず売店が設けられていたのであります。私共は旅費をきりつめ、できうるかぎり参考になるこれらの品を、約 150 点ばかり購入して帰国しました。

船便で送ったこれらの品を整理し、1965 年 2 月 20 日に、第 1 回の公開展示会を東京において開きました。(中略) 私共は、盲人用具がいかに盲人に要求されているかを、この展示会を通して切実に学びとったのであります。(加藤 1971：85)

加藤善徳は、「(前略) 欧米諸国で買い集めた時点では、持ち帰って各方面の関係者に見てもら

い、これを参考にして新製品をつくり出してもらおうと考えたのであって、もうとう、自分たちが中心になってこれをつくり、売り出そうなどとは、考えもしなかった」とし、帰国後3回にわたり開催された展示会に来場した一般盲人の熱望が、加藤善徳らの素人である図書館人に、盲人用具の開発者、発売人にかりたてた様子について、「自ら計画したのではなく、盲人大衆の要求によって押出され、やむを得ず盲人用具に乗り出さざるをえなかったというのが、実情なのです」と述べている。

また、欧米から収集してきた盲人用具を5つに大別して紹介し、①点字筆記具（点字器、懐中器、点字タイプライター等）、②歩行器具（白杖、標識等）、③時計、計器類、④教育、医療器具類、⑤家庭用品（台所、大工、裁縫、ゲーム、玩具等）の全体を通して、「行き届いた愛情と堅牢さであります。どれ一つをとってみても、親切のこもっていないものはありません。見事なヒューマンティの結晶であります。」（加藤 1971：86）と評した。

加藤善徳がとくにうらやましく思った筆記具には「速記用のタイプライター」。歩行器具には、一方歩行補助用具として米独に「タクシー呼び」とでも称すべきもの。時計・計器では、「チューリッヒの空港売店で、盲人用時計をという、即座に各種のものを見せてくれました」。家庭用品に至っては「これは実に徹底していました。全盲の夫婦が家庭を持っても、不自由を感じないまでに、各種の家庭用品が工夫されていました。（後略）」と紹介している。

このような海外の盲人用具を展示会場で実際に手にした来場者の要望に応えるべく、日本点字図書館は盲人生活用具の開発に乗り出すことになり、①各メーカーに呼びかけての製作依頼、②自主製作、③国への予算計上の要求、④海外からの輸入等、これらの動きと並行して用具の店を開くことになったのである。

展示会で三療家の間に、圧倒的人気のあったのは「盲人用血圧計」であった（図3）。アメリカにおいて当時45ドル75セントで購入した商品である。

国産での製品化を探るため、帰国後、加藤善徳は大阪のメーカーに見てもらっていることが判明した。メーカー側は、「これは私の所の輸出品ですが、ただ一カ所、盲人用のために改良が施されています」と回答した。すなわち、それは目で見える目盛盤を、指先でさわれる「凸点」に変えていることを示している。図3の右側の写真には、目盛りの外枠の淵の凸点が見ることができ、これが改良点であることが推察された。

「盲人用具は一般品を、ほんの一部、手でさわってわかるように改良すればよいのだから、簡単にできるだろうと素人は思いがちですが、実はこれが大変困難なことなので、実際にやってみて驚いたのであります。」と、加藤善徳は述べている。なぜ大変困難なことになるのだろうか？

加藤善徳は、盲人用具に改良するための苦労点、すなわち「盲人用の点字目盛りをつけることが、いかに金がかかるものであるのか」について実例を挙げて説明し、「盲人用具」の国産化に苦労した様子とともに、欧米との取組の違いについて詳細に述べている。



図3 盲人用具の「血圧計」

昭和39年の欧米視察の際に購入した。現在、日本点字図書館ふれる博物館にて保管されている。日本点字図書館が撮影した写真から、血圧計の全体（左）と目盛りを読む凸点（右）が判る。

わが国の有名な計器メーカーに、体温計の試作見積もりを依頼した際、「少なくともこの製作には、215万円の資金を必要とします」という回答が返ってきた。盲人用具は、点字器や白杖をのぞけば、製作単位はほとんど100個である。ところがこれをつくるための型代は、何十万、何百万を要するところに問題があることが判明した。欧米の盲人用具が今日のような発達をした裏には、この型代を負担する財団があるからである。すなわち、次の3つの条件（①採算を度外視して、研究開発費を提供するファンドがあること、②このファンドに協力する社会人が大勢いること、③盲人の出入りするところに必ず盲人用具売店があり、必要品の入手が容易なこと）が影響を与えていると推察している（加藤1971：89）。

欧米視察・調査から帰国した本間一夫は、「まったく予想もしなかった大収穫がありました。それは盲人のための生活用具です。われわれが欧米で買い入れてきた約150点の盲人用具が刺激となり、日本にも盲人用具の開発・普及事業が起り、それが日を追って盛んになったという事実です」と述べている（本間1980：147）。

そこで加藤善徳の記述した「用具部が生まれてから5年間の足跡」を筆者が前報で作表した一覧に補足して再提示を試みたい（表1）。

なお、作表中に明らかになったことは富沢永喜の存在である。盲人用計量器の開発・普及に尽力した「富沢永喜」が紹介されていたからである。「盲人用具化」することを具現した富沢永喜の活動は、用具部草創期に於ける足跡に欠くことのできない史実の連なりである（富沢1975：10）ことを再認識すべきである。

表1 用具部草創期5年間の足跡について

(1) 昭和40（1965）年

加藤善徳の記述より	前報再掲（『感謝録』の記載から）
製作面では、1965年に早くも、＜盲人用計量器協会＞が、計量器界の先達である富沢永喜氏などの奔走で誕生しました。そして初めて、盲人用の家庭用上皿秤、身長計、体重計、メジャー、寒暖計等ができました。	「欧米盲人用具展示会」 40年2月20日、21日の両日本館二階集会室において、一般展示会を開いた。北は東北、南は九州まで、420名の参加者があり盛会であった。 （出典：昭和40年7月発行『感謝録』3ページ）
	「欧米盲人用具展示会」 （昭和）40年5月18・19両日、本館二階集会室において第2回一般展示会を開いた。北は東北、南は九州まで158名の参観者があり、盛会であった。7月23日第3回展示会を全日本盲教育研究会出席の教育者のため開催、出席参観者68名。 （出典：昭和41年発行『感謝録』3ページ）
	「盲具研究会」 盲人計量器協会と共催で盲人用具の研究会を5回開き、各種計量器の開発に協力した。 （出典：昭和41年発行『感謝録』3ページ）

(2) 昭和41（1966）年

加藤善徳の記述より	前報再掲（『感謝録』の記載から）
わが日点と有名なナショナルとの共同開発による盲人テーブルコーダーができました。これは4トラック、モノラルで5型リール使用、点字表示のあるわが国唯一の免税品で、13,800円という安価なものであります。この年には、新製品が十種でき、タイマー、タイムスイッチが加わり、一方輸入品もどっと入ってきました。大蔵省（当時）に働きかけた盲人用具の免税が功を奏して参りました。	「欧米盲人用具展示」 新宿小田急百貨店に開かれた「身障福祉展」（本文のまま）に150点の欧米盲人用具を展示したが、初日に皇太子殿下ご夫妻が来臨、本間、加藤両理事がご説明申上げた。妃殿下から盲婦人用に考案された各種台所用品について種々暖かいご下問があった。（本文のまま） （出典：昭和42年発行『感謝録』3ページ）
	「用具部の新活動」 盲人のための生活用具の開発普及をはかる目的で誕生した用具部、「松下電気録音事業部」や「盲人用計量器協会」と密接な連絡をとり、左記の用具を提供、盲人福祉の拡大に資した。（本文のまま） 盲人用リーディングマシン（4トラック、テーブルコーダ）442台、家庭用上皿秤、寒暖計、タイマー、ノギス、ポット、メジャー、身長計、体重計、トランプカード、カナモジタイプ等合計962点取扱。 （出典：昭和42年発行『感謝録』3ページ）

(3) 昭和 42 (1967) 年

加藤善徳の記述より	前報再掲（『感謝録』の記載から）
厚生省（当時）が「盲人用具の販売・斡旋事業費」の予算を 130 万円組み、この事業に公の援助をしてくれることになりました。この年には、プラスチック懐中点字器、表面作図器、湿度計、物差、男子用腕時計等が加わり、売り上げは 31,283 点に上昇しました。	<p>「国産盲人用具展示」 新宿小田急百貨店に開かれた「身障福祉展」に和製盲人用具を展示したが、初日に常陸宮両殿下が来臨、本間、加藤両理事がご説明申上げた。（本文のまま） （出典：昭和 43 年発行『感謝録』3 ページ）</p> <p>「用具部の活動」 盲人生活用具の開発普及を目的に昨年度新発足した用具部は、「松下電気録音事業部」その他と密接な連絡を取り、下記の用具を提供、盲人福祉の拡大に資した。盲人用リーディングマシン（4トラック、テーブルコード）463 台、プラスチック懐中器、家庭用上皿秤、寒暖計、タイマー、ノギス、ポット、メジャー、身長計、体重計、トランプカード、カナモジタイプ、表面作図器、ゲーム各種等、合計 31,283 点取扱。 （出典：昭和 43 年発行『感謝録』3 ページ）</p>

(4) 昭和 43 (1968) 年

加藤善徳の記述より	前報再掲（『感謝録』の記載から）
7 月に、待望久しかった用具部の売店が、新館二階に誕生しました。欧米先進国の完備した売店を見て以来、いつの日かわが国にもと願つづけてきた、盲人用具の売店ができたのです。これでやっと、遅れていた盲人福祉が、欧米並になったと喜んだものであります。この年の売り上げは、52,141 点でありました。	<p>「国産盲人用具展示」 新宿京王百貨店に開かれた「身障福祉展」に和製盲人用具を展示したが、初日に皇太子両殿下がご来臨、本間、加藤両理事がご説明申上げた。 （出典：昭和 44 年発行『感謝録』3 ページ）</p> <p>「用具部の活動」 盲人生活用具の開発普及を目的に一昨年度新発足した用具部は、あらたに厚生省委託事業も加わり、下記の用具を提供、盲人福祉の拡大に資した。盲人用リーディングマシン（4トラック、テーブルコード）649 台、プラスチック懐中器、家庭用上皿秤、寒暖計、タイマー、ノギス、ポット、メジャー、身長計、体重計、トランプカード、カナモジタイプ、表面作図器、ゲーム各種等、合計 52,141 点取扱。 （出典：昭和 44 年発行『感謝録』3 ページ）</p>

(5) 昭和44（1969）年

加藤善徳の記述より	前報再掲（『感謝録』の記載から）
<p>売上げは、72,990点、総額43,627,592円に躍進しました。体温計、方位磁石、東京地図、全国地図等の新製品が加わりました。</p>	<p>「国産盲人用具展示」 新宿京王百貨店に開かれた「身障福祉展」に盲人用具を展示して、一般社会人の啓蒙に資した。（原文のまま） （出典：昭和45年発行『感謝録』3ページ）</p>
	<p>「用具部の活動」 盲人生活用具の開発普及は、厚生省委託事業を加え、盲人福祉の拡大に資した。盲人用リーディングマシン（4トラック）801台を始め、点字器類、計量器類、歩行器具類、計算用具類、時計類、家庭用品類、タイプライター類、ゲーム類、地図類、外国製盲人用具、盲人福祉に関する書籍など合計72,990点を取扱った。これらの中には盲人用計量器協会の富沢永喜氏によって考案された方位磁石、電話ダイヤルスボット、後藤良一氏によって作られた全国立体地図、月ロケット図などが含まれている。 （出典：昭和45年発行『感謝録』3ページ）</p>
	<p>※この「昭和44年度事業報告」の「厚生省委託事業実施状況」には、初めて「盲人用具の販売斡旋」の項目が明示され、次の状況報告が記された。51種32,248点を取扱った。 （出典：昭和45年発行『感謝録』3ページ）</p>

(6) 昭和45（1970）年

加藤善徳の記述より	前報再掲（『感謝録』の記載から）
<p>まだ、第二、四半期の半ばでありませんが、水平角度計が新たに加わっております。今年度の用具部予算は5,500万円で、事務費は458万円、残りが事業費であります。</p>	<p>「用具部の活動」 盲人生活用具の開発普及は、厚生省委託事業を加え、盲人福祉の拡大に資した。30周年記念に開発した盲人用テレビの383台をはじめ、盲人用テープレコーダー（4トラック）、点字器類、計量器類、歩行器具類、計算用具類、時計類、家庭用品類、タイプライター類、ゲーム類、地図類、外国製盲人用具、盲人福祉に関する書籍など合計87,178点を取扱った。これらの中には海外への輸出も若干含まれている。（本文のまま） （出典：昭和46年発行『感謝録』3ページ）</p>
	<p>「厚生省委託事業実施状況」の「盲人用具の販売斡旋」50種42,599点を取扱った。 （出典：昭和46年発行『感謝録』3ページ）</p>

5. 前報までの行間に埋もれていた新事実の発掘

筆者は、前報までに著述した史実の行間には明記できていない事実が多くあることを認識していた。今般の継続調査の結果、行間に埋もれていた新事実を発掘することができたことは本研究の成果ともいえよう。

本稿では、発掘することのできた特筆すべき3件の新事実について、以下に述べる。

5-1. 加藤善徳による「追記」の所在について

特筆すべき新事実の筆頭は、『医家芸術』に掲載された「ていだん」の収録の場において参与していた加藤善徳が、自著において、この「ていだん」の「追記」として、「鼎談」の様子を次のように述べていたことである（加藤 1971：64）。以下の枠内に引用する。

この「追記」に明記されている内容は、『医家芸術』の文献調査からは読み取ることのできなかった新事実である。

この＜盲人福祉に生きる＞は、昭和40年10月6日式場先生のお宅で、『医家芸術』11月号のために行われた鼎談会の記録である。この一か月半後、先生はこの世を去られた。

『医家芸術』は、先生の創刊された月刊誌で、毎号の呼び物は、先生が聞き役で行われる座談会であった。先生は病身をおして、この役をつとめられた。

この日の先生の憔悴ははなはだしく、見るだに痛々しい思いであった。（中略）それ故体力はなく、すぐにでもくずおれそうな先生が、一語一語に力を集中し、低い言葉で話された内容は、私たちにはもったいない思いやりにみちたものであり、悟り切ったひとの美しさにかがやいていた。

また、欧米視察に関するやり取りについても加藤善徳は記している。また、この著書の書名について、「私は本書の出版に当たり、書名を、先生の名づけたこの鼎談会名からいただき、先生のご恩を偲ぶよすがとしたのである。」と記されていることも判明した。

また、この「ていだん」には花島弘も同席しており、機械を持参する労を担っていたことも聞き取り調査から判明している。2021年2月26日（金）13：13 花島弘 証言＝＜「医家芸術」の「ていだん」のときに、式場先生が、応接間で本間と加藤と対談しているそばにはおりました。募金の件などで、お宅や、事務所などには伺ったことがありました。＞とメールで回答している。

今般の継続調査の結果、加藤善徳の自著『盲人福祉に生きる：生きがいを求めて40年』（昭和46年初版＝日点文庫 No.12、日本点字図書館発行）を発掘し、根拠が得られたことは有益であった。加藤善徳の心中を推し量る貴重な文献によって『医家芸術』に掲載された「ていだん」の真実を浮かび上がらせることができたことは特筆すべきことである。

5-2. 花島弘の「海外出張」の所在について

次に、新事実の二つ目として、日本点字図書館における「昭和42年の活動」として記録されていた花島弘の「世界盲青年教育者会議参加」に関して補記する資料が発見できたことも特筆すべきことである。

従来、盲人用具事業の草創期の活動史においては、日本点字図書館が海外で盲人用具を収集・購入し展示した機会は2回、すなわち、①昭和39（1964）年の本間一夫と加藤善徳の欧米視察（後援会の尽力によって、7月25日から9月12日まで9カ国、20都市で現況視察）および②昭和50（1975）年の花島弘の欧米視察（中央競馬福祉財団の助成を得て欧米14カ国の盲人施設を視察）が該当する。昭和51（1976）年発行の『点字毎日』に掲載された「盲具を語る」と題した座談会（当時、日本点字図書館館長の本間一夫・用具部の花島弘、国立特殊教育総合研究所の木塚泰弘の三者による）でも、この10年ほどの間に収集した盲人用具の紹介と課題が話題に上がっている。

花島弘は、昭和42（1967）年8月13日から27日にかけて、アメリカン・エクスプレスとパーキンス盲学校校長ウオーターハウス博士の招待により、パーキンス盲学校（図4）で開かれた第4回世界盲青年教育者会議参加し、帰途、アメリカとカナダの盲人用具施設を視察研修している（日本点字図書館50年史編集委員会編1994：135、198）。この海外出張については、同館が発行している『点訳通信』103報（花島1967：1-2）および105報（花島1968：2-3）に花島は報告している。一方、『世界盲人百科事典』の年表（世界盲人百科事典編集委員会編2004：959）には、「1967年」のできごとに「アメリカ、世界盲人用具展示会、パーキンス盲学校で開催」と掲載されている。花島が『点訳通信』に報告した内容には、この「世界盲人用具展示会」に関する記述は認められなかった。しかし、同時期に同会場のできごとであることから、筆者は事実確認のための再検証が必要であると判断し、再調査の実施に至ったのである。

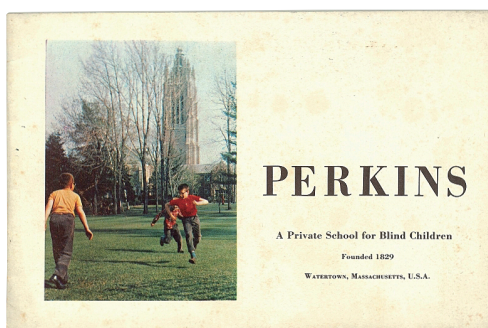


図4 花島が持ち帰った会場の紹介冊子（日本点字点字図書館所蔵）

写真の左側は、パーキンス盲学校で開かれた第4回世界盲青年教育者会議に招待された花島弘である（用具部の売店で接客中の左の男性）。写真の右側は、花島弘が持ち帰った会議会場となったパーキンス盲学校を紹介する冊子である。

加藤善徳は、自著『盲人福祉に生きる：生きがいを求めて40年』（日点文庫 No.12）に、昭和42（1967）年12月20日付の文章を掲載している。とくに、花島弘の昭和42年の海外出張に関連した新事実が明記されており興味深い（加藤1971：41-42）。下記の枠内に引用する。

（前略）そんなある日、アメリカのボストンで開かれた＜国際盲青年教育者会議＞に出席し、その研修視察旅行を終えた若い職員が帰ってきた。その彼が、ほおを紅潮させて報告したところによると、この会議中に＜盲人生活用具展示会＞があり、わが日点の出品、世界中から集まった出席者の絶賛を博したというのである。その中でも、プラスチック製の懐中点字器は、書きよさ、スマートさ、堅牢さ、その上ゼットタイの安価で、引っ張りだこであったという。

上記文中の「若い職員」とは花島弘のことである。花島弘は＜国際盲青年教育者会議＞に関する報告はしているものの、この会議と同時に＜盲人生活用具展示会＞も開催されていたことについては言及していなかった。ましてや、そこに日本点字図書館の盲人用具が出品されたという新事実は、この加藤の記述によって初めて明らかになった。この発見も特筆すべきことである。

5-3. 岩上義則による「点字リスト」について

特筆すべき新事実の発見の最後に、昭和39（1964）年の海外視察において収集・購入した盲人用具に関連するできごとの所在について述べる。

本間一夫と加藤善徳が欧米視察から帰国した翌年は日本点字図書館創設25周年である。盲人用具の開発・発売事業の開始を決断した年、昭和40（1965）年に就職したのが岩上義則である。

今般、21世紀が明けて早々の平成14年に日本点字図書館の館長に就任した岩上義則は、「館歴60年の喜び」と題する寄稿文に46年3カ月勤務した日本点字図書館のできごとを回顧している（岩上2024：2-8）。この回顧文からは、当時のわが国の盲人用具の事情が鮮明に読み取れる。

（前略）それまでの日本における盲人用具の事情は貧弱なもので、あったのは白杖と腕時計と点字板くらいで、メーカーに注文すれば買うことはできたが、1ヵ所で使い勝手を試したり買うことができる販売店のような場所はどこにもなかった。「欧米の盲人は触地図、食料品などの重さを測る計量器、寒暖計、置時計、その他豊富な用具を使って質の高い生活ができています。日本でもぜひそのようにしてほしい」と強く要望する声が聞こえていた。それだけに、日点が盲人用具を始めたことは、とても有意義で喜ばれたのである。（岩上2024：4-5）

欧米視察時に本間一夫と加藤善徳が現地で収集・購入した150点にわたる盲人生活用具は、昭和39年暮れに横浜港に到着した。翌年2月の展示会は好評を得たことは周知のとおりであるが、さらに続く回顧文は極めて興味深い。なぜなら、この欧米の盲人用具150点の「点字リスト」の作成の仕事を岩上義則に依頼していたという新事実が浮かび上がってきたからである。

私は就職して間もないのに、記念すべきこの盲人用具の展示会で早速初仕事が与えられた。150点の欧米用具の点字のリストを作成する仕事である。リスト化に当たっては、一つ一つの用具を念入りに学んで便利さを認識した上で、それを作った国の名前や用具名や販売施設名を記述し、さらには独自の紹介文も書き加えるようにと指示されたのである。何も分からない新米職員の私には重過ぎる責任だったが、自分の点字力や文書能力が問われる試金石になるだろうからしっかりデビューを飾らねばと緊張して頑張ったことが思い出される。（後略）（岩上 2024：5）

おわりに

筆者は社会福祉法人日本点字図書館における草創期の用具事業史に焦点をあてた調査を継続してきた。その結果、今般、新たな事実にも照らして再考する一助となる加藤善徳と花島弘等が著述した貴重な文献を発見するに至り、これまで報告してきた史実の行間に埋もれていた事実の所在を探る作業を試みた。その結果、特筆すべき3件の新事実の所在が明らかになり、本稿の記述に至ったことは本研究の成果といえよう。

しかし、今般の継続調査の結果、同館創設者の本間一夫とともに後援会長の式場隆三郎の「ビジョン」に対する言及には至っていない。昭和39（1964）年の欧米視察の実現に向けて「盲人福祉調査渡米後援会」を結成した式場隆三郎は趣意書に目的を明記している。すなわちビジョンを掲げて募金活動に尽力した事実の所在を未発表資料に照らして探り論ずる作業が積み残されている。また、この昭和39（1964）年7月31日から8月11日開催の第3回世界盲人福祉会議、および昭和44（1969）年10月2日から25日開催の第4回世界盲人福祉会議に本間一夫と加藤善徳は出席している（日本点字図書館50年史編集委員会編1994：197、199）。この国際会議出席を経て世界の動向をより把握した本間一夫は、昭和46（1971）年には、「盲人福祉センターの実現を」と題する「日本点字図書館」の将来像を明らかにしている（本間1971）。同館を率いる両者のビジョンに照らして史的探究作業を進めることは今後の課題となろう。

日本点字図書館における後援会の活動に尽力した式場隆三郎の功績は周知のとおりであるが、その真実に迫ることのできる同館所蔵の未発表資料の分析は作業途中にある。式場隆三郎がどのようなビジョンを掲げて本間一夫と加藤善徳と協働したのか、その史実を解明することは急務である。

なお、本稿初校の時点で、「用具部創設20周年感謝の集い」に関する貴重な新資料が同館より提供された。谷合は、「昭和61年4月25日、用具部創設20周年感謝の集いが開催された。盲人用具の斡旋点数は、（昭和）56年には遂に年間20万点を超え、（昭和）61年には23万8,000点に達した。この20年の歴史は、新しい盲人用具の開発と普及の歴史であったといえる。（後略）」と述べている（谷合1994：274）。同館盲人用具事業20年の史実を探究するため、分析途中にある諸情報の精査に務めたい。

〔註釈〕

- 1) 目の不自由な子どもたちが希望していた「音の鳴りつづけるボール」を実現するために、星川安之は「メロディボール」を開発研究過程に日本点字図書館を訪ね、用具部の花島弘に相談をしている。
- 2) 「メロディボール」とは、メロディの鳴るICチップの入ったタオル地の玩具で、少しの振動を与える、30秒間電子音のメロディ（曲名＝勝利のうた）が鳴るボールである。この商品は、日本点字図書館用具事業部に於いて、2年間で3,000個発売された。当時、18歳以下の視覚障害児は5,000人ほどといわれていた中での3,000個の販売は大きな数字であった（星川2011：88）。

〔謝辞〕

日本点字図書館理事長の長岡英司先生、館長の立花明彦先生に同館内の貴重な史料の閲覧許可を賜りました。文献照会ならびに諸資料の収集整理にご助言を賜りました本間記念室の伊藤宜真様、濱田幸子様、渡辺明様、川島早苗様に多大なご高配を賜りました。

また、2023年3月4日に急逝されました花島弘様には、当時の貴重な情報をお寄せいただきました。日本点字図書館に於ける研究活動に長年にわたり格別なご高配を賜りました。ここに記して深甚なる感謝の意を表します。盲人用具事業に尽力されました花島弘様に本稿を捧げ心よりご冥福をお祈り申し上げます。

〔文献〕

- 天野繁隆（2014）〈ユニバーサルデザインは「にってん」から〉『にってんボイス 2014年8月号』日本点字図書館。 <https://www.nittento.or.jp/images/pdf/rental/nv1408.pdf>（最終閲覧年月日：2024年11月10日）
- 花島弘（1967）「アメリカの国会図書館盲人部について」日本点字図書館編『点訳通信』103報、1-2。
- 花島弘（1968）「レコーディング フォア・ザ・ブラインド」日本点字図書館編『点訳通信』105報、2-3。
- 花島弘（1994）「障害者を手助けする「専用機器」：「盲人用具」の歴史と現状」E&Cプロジェクト編『「バリアフリー」の商品開発』日本経済新聞社、22-23。
- 花島弘・福井哲也（1998）「盲人用具と歩んで30年：専用品から共用品までの道を振り返る」『視覚障害』第156号、28-39。
- 本間一夫（1958）「呆然自失」『医家芸術』2（8）、42-43。
- 本間一夫・加藤善徳・式場隆三郎（1965）「ていだん：盲人福祉に生きる」『医家芸術』9（11）、14-22。
- 本間一夫（1966）「呆然自失」『医家芸術』10（2）、26-27。
- 本間一夫（1971）「式場先生を偲ぶ」『医家芸術』15（12）、28-29。
- 本間一夫（1971）「盲人福祉センターの実現を」『ほっかいジャーナル』（平成15年9月号＝本間一夫追悼号に掲載）。
- 本間一夫・花島弘・木塚泰弘（1976）「座談会 盲具を語る」『点字毎日』増大第2747号（昭和51年1月4日曜日）発行。墨字資料＝日本点字図書館所蔵。
- 本間一夫（1980）『指と耳で読む：日本点字図書館と私』（岩波新書黄版138）岩波書店。
- 本間一夫（1997）「式場隆三郎先生を偲ぶ」『点字あればこそ：出会いと感謝と』善本社、53-55。
- 本間一夫と盲人用具の50年展企画委員会編（2014）『本間一夫と盲人用具の50年展 展示品リスト』日本点字図書館（非売品）。
- 岩上義則（2024）「点字図書館歴60年：たたき上げの述懐」『法友文庫だより』（54）、2-8。
- 星川安之（2011）「おもちゃのトミー、HT研究室」後藤芳一・星川安之『共用品という思想：デザインの標準化をめざして』岩波書店、88-92。
- 星川安之（2014）「本間一夫と盲人用具の50年展によせて」日本点字図書館。
https://www.nittento.or.jp/press/pr141001_youguten.html（最終閲覧年月日：2024年11月10日）。
- 星川安之（2020）「あとがき」藤井克徳・星川安之『障害者とともに働く』（岩波ジュニア新書925）岩波書店、183-193。
- 加藤善徳（1971）『盲人福祉に生きる：生きがいを求めて40年』（日点文庫No.12）日本点字図書館。
- 加藤善徳（1975）「日本点字図書館三十五年小史」『日点だより』（2）、2-5。
- 日本点字図書館50年史編集委員会編（1994）『日本点字図書館50年史』日本点字図書館（非売品）。
- 西脇智子（2022）「式場隆三郎による日本点字図書館への後援：日本医家芸術クラブ機関誌『医家芸術』の記事調査より」『実践女子大学短期大学部紀要』（43）、35-52。
- 西脇智子（2023）「「点字本ゴッホ」という起点と真相：式場隆三郎による日本点字図書館後援活動の継続調査より」『歌子』（31）、65-78。
- 西脇智子（2024）「身体障害者福祉展」における日本点字図書館の活動実態：「事業報告」調査より『実践女子大学短期大学部紀要』（45）、87-107。
- 世界盲人百科事典編集委員会編（2004）『世界盲人百科事典』（底本：世界盲人百科事典編集委員会編（1972）『世界盲人百科事典』、社会福祉法人日本ライthouse刊）、日本図書センター。
- 式場隆三郎（1961）「年譜」『現代知性全集（49）式場隆三郎集』日本書房、268-276。
- 杉山雅章（2021）「③盲人用具部設立50周年記念イベントの開催」、「プロGRESS」編集委員会編『プロGRESS』

- 日本点字図書館（非売品）、64-65.
- 谷合侑（1994）「本間一夫と日本点字図書館」日本点字図書館50年史編集委員会編『日本点字図書館50年史』日本点字図書館（非売品）、213-285.
- 富沢永喜（1975）「「盲人用計量器」十年の歩み」『日点だより』（2）、10.
- 富山幹太郎（1994）「3. 「晴盲共遊玩具」は業界団結のシンボル」E&Cプロジェクト編『「バリアフリー」の商品開発：ヒトに優しいモノ作り』、日本経済新聞社、299-303.
- 八木謙治（1966）「式場隆三郎著作年譜」『民芸手帖』（92）、42-50.